
JとQのワンペア

黄泉塚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JとQのワンペア

【Nコード】

N2052B

【作者名】

黄泉塚

【あらすじ】

殺し屋、魔法使い、超科学者——それら全てが集まるこの不思議な世界。そこに住む一人のある意味不幸で最も幸運な殺し屋のお話。

プロローグ..『新宮 秋人』

紛れも無く日本だけど日本じゃない。
ココはそんな世界。

殺し屋や暴力団が満ち溢れ。
人々はちよつとした魔法を使い。
なぜかある程度進んだ科学力もある。

けれども明るい。
底抜けに明るい。
ココはそんな世界。

そしてこれはそんな世界に住む男の子————もとい
女の子の生き様を描いた話です。

「ククク、楽勝だな。
流石は俺だ。」

真夜中の路地裏。
そこに居る少年が呟いた。
年に似合わずに着込んだスーツが真夜中の闇に酷く似合う。

しかし15、6の少年がいるには些か不自然な時刻と場所だ。
何か怪しい事をしているとしか思えない。

——— 実際しているのだ。

少年の足元には4、5人の大人が血まみれで横たわっている。

その大人達は先ほど、『とても異色な死体となった』。

何故異色か、それは大人達の体には無数のトランプが突き刺さっているからだ。

そして少年の手にはトランプが握られている。

つまり、彼らを死体と変えたのはこの少年なのだ。

この少年がここにいて、彼らを殺したのは理由があった。

彼には彼の仕事があったからだ。

少年の仕事は殺し屋。

その年と殺しの手段でその道では有名な殺し屋だった。

「さて、そろそろ帰りますか。

ああ、報酬も貰わなくちゃな。」

そう言って少年は身を翻し、路地裏を後にした。

いや、しようとした。

ドン、日本人にはおよそ馴染みの無いような音が路地裏に響く。

何かが爆発するような、そんな音。

銃声だった。

まだ辛うじて生きていた大人たちのうち一人が少年を撃つたのだ。

少年の服に赤いしみが浮かぶと同時に男は息絶えた。

しばらく何がおきたか判らなかった少年も痛みが浮かんでくると同時に何が起きたかを理解する。

その後、彼は必死の思いで帰宅する。

家のドアを開け、秋人をみて近寄ってきた家族の叫びを聞いて、彼は意識を失った。

そうして殺し屋、新宮 しんぐう 秋人 あきとの人生は最後を告げた。

プロローグ..『新宮 秋人』(後書き)

プロローグなので短いです。

これからの話は…どうぞでしょう(汗)

少しでも気に入っていただければ幸いです。

第一話：阻まれた男子トイレ

「…つぐ…」

どこかで見た様な、けれど何処か曖昧な記憶の中にある風景で彼は腹部の痛みで目覚めた。

…ここは何処だろう。

彼はまずそう思っていた、だがその疑問はあまりにも特徴的なその部屋の雰囲気が彼に彼自身の居場所を告げる。

…消毒液の匂いが鼻につく、白い壁とシーツが癩に障る。。

ああ、ここは病院か…

そう安堵した彼はベッドに体を預けた。

…が。

「つて！病院！？」

一瞬得た落ち着きを失い、彼はそう叫ぶ。

どうやら彼はまだ記憶が曖昧なようだ。

曖昧な記憶を色づけるため、彼は先日の記憶をさかのぼり思い出ししていく。

夜中に副業の殺し屋として活動して、仕事を終わらせて。

家に帰ろうとして、その前に報酬を受け取ろうとして。

微かに生きていた標的に銃で撃たれて。

そうだ。

確か、先日俺は死んだ筈…

そう思った少年は頬をつねってみる。

…痛い。

「夢じゃない…助かったのか…あの傷で…」

世の中には凄い医者もいたものだ。

少年は素直に感心し、家族とまだ見ぬその医者に感謝した。
しかし、医者への感謝はこの後直ぐに消えることになる。

「…？」

あれ…俺ってこんな声だったか？」

ふと自分の声に違和感を抱く。

なんというか、高い。

そう言えば頬をつねった時もなんとなく肌触りが違ったような…
まさか、今の俺は俺じゃなくて病人に憑依しているだけじゃないだろうな？

そんなオカルト的な事を考え、不安になる。

なんとなく胸騒ぎを覚えた『秋人』は辺りを見回す。

鍵をかけれる引き出し。

ベッドを仕切るカーテン。

駄目だ、鏡がない。

「————トイレ。」

そうだ。

ここが病院ならトイレの一つや二つはあるだろう。

あそこなら間違いなく鏡がある。

そう思った秋人は病室を飛び出した。

まだ撃たれたところが痛むが、我慢の出来ないほどではない。

秋人は病室を出て直ぐに看護師を見つける。

看護師ならばこの病院の事は良く知っているだろう。

そう思った秋人はすぐさま看護師に道を尋ねることにした。

「すみません、トイレって何処にありますか？」

「トイレならすぐそこですよ。お大事にどうぞ。」

「ありがとうございます。」

そうとだけ言って彼はすぐさまトイレに駆け込もうとした……と、これが悲劇の始まりだった。

「ああ、違います。」

そっちは男の用トイレですよ」

トイレに入ろうとした彼はなぜか看護師に呼び止められた。

この時点で八割方……いや、五割方『秋人』の中で答えは出ていた。しかし、確かめられずにはいられない。

そう決心した秋人は看護師の制止を振り切り、トイレに入った。

鏡はトイレの入り口からすぐの場所に有った。

何故だかギリギリで外からは見えないようになっていた。

だから秋人はココに入るしかなかった。

半ば自棄だったのかもしれない。

そして

「な……っ……なんだよこれはあああ！」

病院のトイレから少し高めの綺麗な叫び声が病院にこだました。

彼…いや。

彼女が鏡を見た第一声はそれだったという。

「どういう事か、説明してもらおうぞ！

ドクターと我が家族！」

「えー？面倒くさいなあ、細かいことは気にしなくてもいいじゃない。」

飄々と秋人の母親が答える。

秋人は家族と医者を前にして足を組んで座っていた。

殺し屋が殺気を放っているのだ。

場に威圧感が流れる筈だが…どうもそれは無い様子だ。

「細かくねえ！銃で撃たれたと思ったら、気付けば俺は女だ！絶対説明してもらおうぞ！」

それとどう細かいのか、そこん所も詳しくな！」

「しょうがないなあ…僕が説明しましょう。」

医者が眼鏡を上げながら言う。

医者の容姿はいかにも中年男性といった感じだ。

痩せていて、顔はそこそこ整っているが

その嫌味な微笑の所為で掛けている眼鏡がいやみったらしく感じる。

「あ、ちよつとそれは…」

母親が何故だか話して欲しくないようなそぶりを見せる。

秋人にとっては状況を説明してもらえら誰からでも良かったので睨みをきかせると母

親は黙った。

「説明してもらおうじゃないか。」

「いいよ。」

じゃあまず君は大怪我をしてこの病院に連れてこられた。

それは判るよね？」

秋人は黙ってうなずいた。

そんな秋人を見て医者は満足そうに続ける。

「それでね、僕は君の体を見て成功率は五分五分だと思った。

けど君の体の運動能力は素晴らしかった。

それに、試したい事があったんだ。

だから僕はこう言った。」

：医者がいったん間をおき、続けた。

「彼を女の子にしても良いならこの手術を確実に成功させる手立てがあります。」

この時点で秋人にはいかな予感があった。

「それに、治療費は全額病院で負担しましょう。

とね、そこで お母さんは即答したよ。

お願いします！ってね。」

医者が話し終わると同時に秋人は母親を見た。

申し訳無さそうに笑っている。

このやろう…本当に親を殴りたいと思ったのは今日が初めてだ…
秋人はそう思っていた。

第一話：阻まれた男子トイレ（後書き）

…まあ、なんと言うか。

変な話ですね（汗）

作者のやりたい様にやってしまっているので設定とかは未熟です…
これでも導入部分なので自粛しているつもりではあるのですがねえ
…（苦笑）

では、これからよろしくお願いします。

第二話：退院と休日。

殺し屋、秋人が入院してから3週間が経過した。

医者、『特別な緊急外科手術』によって秋人はすぐにでも息絶えるような状況から命を取り留めた。

しかも、治療費は全く取られていないし、なんと今日退院できるという。

話だけ聞いているとまるで天使のような医者だ。

しかし、こんな上手い話は早々なく、彼は大きな『副作用』なる物を受けていた。

「…はぁ……」

少女は手鏡を見て深いため息をつく。

高貴な銀髪。

幼さを残しながら、何よりも整いすぎた顔立ち。

大きすぎず、服の上からでも判る嫌味でない綺麗な胸。

女性としては完璧すぎる。

そう、女性としては。

しかし、手鏡を持つ『少年』は決してそれを快く思っていなかった。

彼が元・男性だったからだ。

別に望んだ性転換ではない、気が付いたら完全に完璧な女性の体になっただけからだ。

それこそが副作用、そんなに上手い話はないというわけだ。

そんな事を思い、『彼女』はまた大きくため息をついた。

あれから、色々変わったことがある。

まず、女性としての動作をマスターした事。

…あの母親に教えられて。

正直、まだ少し恨んでいる。

まあ、でもこの病院に連れてこられなければ命が危なかったらしいので案外良かったかもしれない。

「けれど…なあ…」

あれから変わった事はまだあった。

まずは学校生活。

新宮 秋人は『転校』した。

親が動いたらしい。

これでも親は何だかんだで中々の権力を持っている。

無論、お金も。

現に、彼女の両親は彼女が目覚めてから3日と経たないうちに沢山女物の服を買ってきた。

だったら治療費くらいケチるなよ…と言いたい。

そして、学校生活はまだ変化した点がある。

これは、日常にも大きな変化を残した。

秋人がいた学校に『新宮 秋奈』しんぐう あきなと言う少女が『転校』してくるのだ。

「シャレじゃ済まねえよな…」

これは…

名前まで変えるかよ…普通…」

少女は退院の為の荷物をまとめ終わり、呟いた。

今母親は退院の手続きだかなんだかに行っている。

そう、『新宮 秋奈』のだ。

土日を挟み、明々後日からまた学校生活が始まる。

いや、『また』は無いか。

そんな風に自嘲的に思っていると母親が呼びに来た。

「もう退院できるのか。」

「ええ、特別な手術による恩恵の一つだってさ。

先生にちよつとは感謝してもいいんじゃないかしらねえ？」

こんな体じゃなかったらな、と秋奈は続けた。

これからが思いやられる…

退院二日後、日曜日。

秋奈は母親と共に買い物に来ていた。

物凄い量の服を買い込んだというのに、まだ必要だと言うのか。秋奈は半分あきれていた。

母親曰く、「神無ちゃんだと買い物に付き合ってくれないから一度娘とショッピングしたかった」ので秋奈を連れまわしているらしい。だからと言って病み上がりの人間を連日で連れまわすのはどうかと

思うが。

そんな風に思い、秋奈はアイスクリーム屋に並ぶ母親を腕を組み、飽きれて見ていた。

因みに神無とは秋奈の妹である。

まだお兄ちゃんと呼んでくれているのが秋奈の救いになっている。

「ねえ、その子。」

秋奈が仏頂面で母親を見ていると自分が呼ばれているのに気付く。それも見知らぬ男にだ。

全く、娘をもう少し見ていろ、母よ。

本日6度目の出来事に苛立ちながら秋奈は返事を返す。

「私ですか？」

「……何？」

目下訓練中の女性らしい喋り方で応接する。気を抜くとすぐに本性が出るからいけない。

「つれないなあ、可愛いんだからもう少し笑おうよ。」

初対面の男に『男』が可愛いなどと言われて喜ぶ筈も無い。

ってかなんでコイツこんなになれなれしいんだ。

そう思っていると段々と苛立ちが大きくなってくる。

「私、あまり笑わないんです。

それより、何か用ですか？」

「用って言ったら一つしかないでしょー？

一緒に遊ぼうよ！」

「嫌です。」

今日はお母さんと一緒に買い物をしに来てるんです。」

本当になれなれしい。

同じ男としてもむかつく奴だ。

ああ、もう俺は男じゃないんだっけ：

そう思いながら秋奈はうなだれた。

母よ、早く帰って来い。

面倒くさくて堪らない。

「こんな年でお母さんと一緒に？

駄目だよ、若いんだからもっと遊ぼうよ！

この機会に男の子の事を少し知ってもいいんじゃないかな？」

——男ならまるで自分のかの様に知ってるさ。

思わず口から出そうになる。

しつこく口説いてくる男に秋奈の苛立ちは限界に達していた。

胸ポケットから53枚のカード——商売道具を取り出すとそれをシャッフルし始める。

「どうしたの？トランプなんて出して。

あ、ひょっとしてそれで遊びたいのかな？」

なんとなく馬鹿にされているように思い、ついに苛立ちは限界を超える。

そして、秋奈はついに本性を出した。

『男』としての我慢が限界を超えたからである。

「ふう…判らないか？

さっさと消えてくれ。

男なら良く知っているが、お前の様に見てるだけで苛立ってくる奴は知らん。」

「なっ…!?!」

「更に言わせて貰うとだ。

お前は見た目も声もその口説き方も俺の好みじゃねえ。

もう一度言う、さっさと消えろ。」

「んだとテメェ!

下手に出てりゃ調子乗りやがって!」

逆上して男が襲ってくる。

：まあ、町を歩けば誰もが振り返るような可愛らしさの女性にこんな事を言われては当然な気もするが。

それが彼の運のつきと言うわけだ。

まず、一瞬のうちに一枚のトランプが飛び、男の髪のとっぺんを剃った。

この時点で男は酷く滑稽な容姿になっている。

更に秋奈の細い指に掴まれたトランプが男の耳と鼻の付け根に赤いラインを描いた。

赤いラインから赤い液体が少しずつ滲んでくる。

その赤いラインは位置的に見えなくとも痛みが彼に『それ』を示唆する。

そう、「次は耳と鼻を切り落とすぞ。」と。

「な…な…」

「女だからって人を甘く見るとこうなるんだ。
女の殺し屋だって珍しくは無いんだからな。
いつか本当にその耳と鼻を切り落とされるぞ。
じゃあ消えろ。」

ああ、そうだ。

『私の事を誰かに喋ったら殺しますから♪』」

言葉の終盤を無邪気な少女のような声で締めくくる。
その言葉のコントラストは男の恐怖を煽り立てた。

「お…おま…っ！殺し屋…！」

そうとだけ残し、彼は大急ぎで逃げていった。
この世界で殺し屋に出会い、更に口封じをされるといつ殺されるか
判らないからだ。

そのくらい強くないと、情報力がないとやっていけない仕事だから。

「おまたせー♪待ったかなあ秋奈ちゃん。」

男が去ると同時に母親が現れる。

…さてはタイミングを見計らってやがったな。
そう思った秋奈は皮肉たっぷりに母親に語りかける。

「ああ、自分でも皮肉なことに待ったさ。
もう少し娘を大切にせんか？」

今日だけで6度目のナンパだぞ。」

「可愛いんだからしょうがないよ。」

まあ税だとも思いなさい。

それに、秋奈ちゃんが危険ならママはもっと危険でしょう？
後、秋奈ちゃん言葉おかしいよ。」

「…ちっ。

『しょうがないなあ、判ったよ。

お母さん。』」

そんな会話を過ごしながら、荷物を増やしながら日曜日は終わっていった。

余談だが、日曜日が終わるまでに秋奈は後3人にナンパされる事になった。

そして可哀想な男がまた一人増えていた。

第二話：退院と休日。（後書き）

ちよつとやりたい事やれてますW

トランプって言ったら殺し屋ですよね。

え、違いますか？

……まあ、それはおいといて。

これからどんどんやりたい事をやっていきます。

それでは次話でお会いしましょうW

第三話：学校、美少女転校生の運命

「…くそ、ある程度覚悟はしてた。
だがこれは…無いよな…」

鳥の鳴き声がさわやかな朝。

とある一軒家の一室で美しい少女が憂鬱そうに呟いた。

理由は鏡の前の制服を来た自分があまりにも 出来ていたからだ。

————— 今日の新宮秋奈の初登校日。

鏡の前の『元』新宮秋人は大きなため息を漏らした。

「…それじゃ、行つて来る。」

朝の支度を全て終えた秋奈はそうとだけ言って家を出たのであった。

「えーっと…新宮秋奈さんだね？」

「はい、そうです。」

朝の学校。

秋奈は『転校生』と言うことで何時もより早く学校に付いていた。何でもちよっとした手続きと教師の自己紹介があるらしい。まあ、今更自己紹介してもらうほどの人物でもないのだが。なぜなら秋奈はこの教師を知っているからだ。

――元担任だから。

つまり、秋奈はまた同じクラスで過ごすことになる。少し頭が痛くなったような気がした。

「一応紹介しておくよ。

僕は山賀^{やまが}雄一^{ゆういち}。

君のクラスの担任になるね。」

「はい、新宮秋奈です。

よろしく願います。」

そう言っ秋奈は頭を下げた。

そのしぐさの可愛らしさに山賀の顔は少し赤くなっている。

「よ…宜しく。

そう言えば、君の前にも新宮って言う男の子がいたなあ。成績は良かったけど礼儀の無い子だったなあ…」

「あはは…そうですか…

同じ苗字って偶然ですね…」

同じ人間ってのはもつと偶然だけだな…

と秋奈は続け、心の中で山賀を睨んだのだった。

「ハイ皆静かに。」

小耳に挟んだりして知ってるとは思いますが、今日からこのクラスに新しい仲間が入ります！」

教室の中から声が聞こえる。

教師の忠告とは裏腹に教室内はかなりの賑わいだ。

自己紹介から15分程、秋奈は自分の教室のドアの前に立っていた。これから転入生恒例の挨拶があるという訳だ。自分の良く知っているクラスで自己紹介するというのはなんだか逆に緊張する。

「じゃあ入って。」

そんな事を考えている内に山賀の声が聞こえた。準備完了と言うわけだ。

「はい。」

そうとだけ言い、秋奈が教室に入った瞬間だった。

あれだけやかましかった教室は無音になった。

秋奈は自分が何かやってはいけない事をしてしまったかと思ったが、その考えは直ぐに否定される。

———この眼差しは、俺に見惚れている？

冗談だろ？

「自己紹介、頼むよ。」

「あ、はい。」

呆気にとられているうちに教師から自己紹介が催促される。
気を取り直し、黒板に文字を書いて秋奈は言う。

「はじめまして。」

新宮秋奈と言います。

こちらの方には転校してきたばかりで判らない事だらけですが、
どうぞよろしくお願いします。」

ここで、満面の笑みで締めくくった。

一応ミスは無いはずだ。

秋奈がそんな事を考えている内に大きな拍手が巻き起こる。
別段、換わったことはしていないはずなのだが…

「ん、ありがとう。」

皆優しくしてあげような！

えー…それじゃあ席は…」

山鹿がそこまで言いかけた途端、手を天に向け、まっすぐと伸ばす
男が居た。

「ハイ先生！ココは学年委員であり学級委員である僕の隣が良いと
思います！」

あれは…平沢か。

秋奈の記憶にある限りでは真面目であり明るくない男のハズ。奴のような男がそこまでする容姿なのか……この姿は……

秋奈はそんな事を思い改めて自分の容姿の美しさを再認識した。

平沢の近くの男子達は大きく肯定し、平沢から遠い意男子達は逆に大きく否定した。

「それだったら香山さんも学級委員です！
だから香山さんの隣がいいと思います！」

女子学級委員・香山の後ろの男、片桐が叫んだ。
そうなるとう度はまたそこから遠い男子が叫び始める……
—————もはやディペートだ。

恐慌状態のその場に決着をつけるため、秋奈は自分から席を指定することにした。

「すみません！皆さん聞いてください！」

秋奈がそう言った瞬間、あれだけ煩かった教室はまた静かになった。自分の言葉に魔力すら感じてくる—————。

「窓際の後ろの席が開いていますので私はそこに座ります。

目が悪いわけでもありませんし、学校の地図とかは少しずつ覚えていきます。

……いいですね？先生。」

秋奈が指定したのは元の自分の席だった。
こうして自分で決めた方が余計な時間も使わないし、何より慣れていい。

「あ：ああ、いいよ。」

それじゃあこれでホームルームは終わり！

あんまり新宮さんを困らせるなよお前達！」

そう言って山鹿は消えていった。

—————この後秋奈は、殺し屋をやっている

未だ出会った事の無い恐慌状態の中心人物となる事になった。

第三話：学校、美少女転校生の運命（後書き）

ココだけ見るとバトルは関係ないです。

次話では多分バトルたっぷりどすえ。

それではまた！

…あとがきがどんどん短くなってるなあ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2052b/>

JとQのワンペア

2010年10月9日02時16分発行